創刊一〇〇巻を記念して

東基吉・くめのことなど

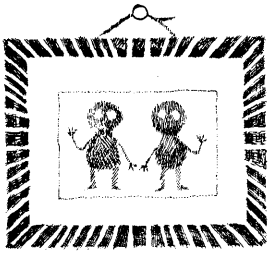
―「鳩ぽっぽ」から「口演童話」まで―

森上　史朗

新宮駅の歌碑の前に立って

今から十数年前に私と新宮市の幼稚園との交流は始まった。当時はまだ国鉄という名称の汽車が走っていた頃のことである。汽車が名古屋を出てかなりの時間を走った頃左に紀伊長島あたりの海が見えてくる。それからまた、山やトンネルをいくつもこえ、海が見えてきてしばらくすると新宮駅に着いた。新宮駅の駅前には東くめの胸像と彼女の作詞になる「鳩ぽっぽ」の歌碑が建っている。新宮は東くめそしてその夫、基吉の出生の地なのだ。私は保育史を少し研究しており、東夫妻のことも調べたことがあるので、その歌碑の前に立って、殊さらに感慨深いものがあった。

当時は東くめのことは名誉市民ということでよく知られていたが、一九五八（昭和三三）年まではごく一部の人を除いて彼女のことを知る市民はきわめて少なかったということである。それがその年にNHKの人気番組「私の秘密」で「鳩ぽっぽ」をはじめ、「お正月」（もういくつ寝るとお正月）、「水鉄砲」（水をたくさん汲んできて、水でっぽうで遊びましょう）などの作詞者で、しかも、新宮市で育ったということが紹介され、一躍有名になったという。そして一九六二（昭和三七）年には名誉市民に推され、駅前に歌碑が建立された。



このように、東くめのことはほとんどの市民によって知られるようになったのであるが、「鳩ぽっぽ」などの『幼稚園唱歌』を作ることを東くめと瀧廉太郎に依頼した張本人の東基吉については、近親者とその周辺の人以外には全く知られていない存在であった。私は毎年数回新宮市を訪れながら、教育関係者に基吉がわが国の教育改革、なかでも幼児教育の改革にどれほど大きな貢献をしたかをできるだけ紹介するようにしてきた。そのうちに基吉の業績も知られるようになり、地方の文化誌『熊野誌』は、一九九七（平成九）年に刊行された第四十三号において、東基吉・くめ特集号を組んでいる。

「鳩ぽっぽ」をめぐるいくつかのエピソード

『幼稚園唱歌』ができた由来については、基吉自身が『幼児の教育』に「婦人と子ども（幼児の教育の前身）創刊当時のこどもと其頃の幼稚園の状況に就いて」（第五十巻第十一号）という文の中で記述し

ている。それによると、その頃はきわめて古典的な歌詞に古い雅楽の旋律をつけて歌わせていたので、子どもには全く歌詞が理解できないものであった。そこで基吉は歌詞も曲も子どもらしく、子どもによくわかるものでなくてはならないと考えていたので、時々妻くめと相談して、簡単な童謡を作って附属幼稚園の職員会議に持ち出したが、何とかかんとか理屈をつけて採用されなかったという。ところが、その頃、音楽界の麒麟児と呼ばれていた瀧廉太郎が東の家に遊びに来て（瀧は東京音楽学校、今の東京芸大でくめの二年後輩であった）、基吉の話を聞いて、「幼稚園で歌わせる唱歌を作ろうじゃありませんか、奥さんが歌詞を作ってくれれば自分が作曲するから」という話で、それがまとまって、『幼稚園唱歌』になったという。しかし、これも昔のままのものを墨守する傾向が強かった当時の附属幼稚園の保母には歓迎されなかったが、二葉幼稚園（東京の保育園の草わけ）の野口幽香女史や女子高等師範学校の音楽教師であった吉田信太氏などは、まるで天来の福音のように喜んでくれたという。

その後『幼稚園唱歌』は次第に幼稚園に普及していったのであるが、「鳩ぽっぽ」の歌については文部省唱歌の「鳩ぽっぽ」だけが日本国中に広がってしまって、くめの作ったものはあまり知られなくなっていった。そのことについて近親の由比照子氏は自分の夫の母（義母）東くめから直接聞いた話として『熊野誌』の特集の「思い出すままに」の中で次のように語っている。

「鳩ぽっぽでくめが残念がっていた話があります。瀧さんとくめとで子供の歌を作ってから後に、文部省が尋常小学唱歌と云う本を出します。それに鳩の歌があるのですが、くめは申しました。『ぽっぽで始まると鳩ぽっぽだか汽車ポッポだかわかりゃしない。私は初めから鳩ぽっぽとうたい出しているんだ

よ、それに喰べたらみんなで飛んで行けなんて、喰べ立ちする様なお行儀の悪いことを教えてないよ。喰べてもすぐに帰らずにぽっぽぽっぽと鳴いて遊べって、みんなと仲よくする様に教えているんだよ。文部省の歌が出た時、よっぽど文句を云おうと思ったけれど、私が騒ぐと誰か若い人が傷つくだろうし、その人の一生に影響すると気の毒だから我慢したんだよ』と」。

現在は著作権が守られているが、昔は著作権どころか作者の名前さえ出さなかったので、誰の作かもわからなかった。「鳩ぽっぽ」が日本で最初の口語体での話しことばの子どもの歌であることも、くめがNHKの「私の秘密」に出演してはじめて日本中の人に、また新宮市の人にもわかったのである。

昨年は奇しくも『幼稚園唱歌』が作られてから丁度百年目に当った。そこで新宮市ではそれを記念して、安田祥子、由紀さおり姉妹を招聘して、市民会館で「童謡と唱歌の夕べ」を開催し、『幼稚園唱歌』のいくつかが披露された。その翌日、市の求めに応じて、私が「東基吉・くめ夫妻の生涯と業績」について記念講演をした。もう新宮市に基吉・くめ夫妻についての研究者が輩出していて、本来ならば、私の出る幕ではないと辞退したのであるが、東の活躍していた時代的背景も広く紹介して欲しいということで引き受けたわけである。

明治期における貴重な育児記録

一九〇四（明治三七）年に瀧廉太郎が亡くなり、くめは「瀧廉太郎君の一周忌に」（『婦人と子ども』第四巻第八号）を発表した後、唱歌を作ることは一切止めている。その理由は定かではないが、この頃、長男の貞一の育児に追われる忙しい毎日で、作歌どころではなかったということもあろうが、もう一つは瀧廉太郎という同志を亡くしたことも唱歌の

創作に一つの区切りをつけることになったのではないかと推察される。

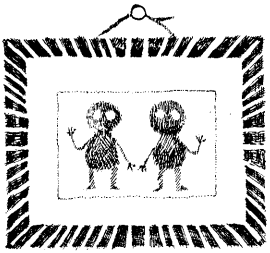
それからは、『婦人と子ども』に貞一の育児日記ともいえる「貞一の日記」を第四巻第七号から二二回にわたって連載している。

この貞一の日記より以前に『婦人と子ども』にはいくつかの育児記録が掲載されている。たとえば無名氏による「或母の日記」（第一巻第五号より第二巻第四号まで六回連載）、印東おとなによる「小さき日誌」（第一巻第九号より第二巻第六号まで五回連載）、会員某女による「富士ちゃんの日記」（第三巻第二号より第三巻第四号まで三回連載）などである。これらはいずれも短い期間の断片的な記録であるのに対し、「貞一の日記」は、誕生から満三歳を迎えるまでの三年間の記録で、比較的長い期間にわたっての成長過程が克明に継続して記録されている。これには単にその日の出来事だけではなく、食事の内容、健康状態、成長の様子、親のかかわりなどが正確に記録されている。

『婦人と子ども』の第六巻第四号には、基吉が「子どもの日記につきて」という一文を載せているが、そこには育児日記をつけることの重要性や記録の仕方などが記述されている。また、第六巻第五号には、東基吉著『新案・育児日記』（弘道館発行）の広告が載せられており、これらのことから「貞一の日記」はくめと基吉の共同の仕事と考えてもよいのではないだろうか。児童文化研者の山崎千恵子氏は、この日記は「明治期に書き残された最初の〝子どもの日記〟であり、それはとりもなおさず、従来の日本の子育てから、西洋の近代育児法への過渡期の精確な記録であり、〈日本児童史〉研究の視点から見れば、近代日本における〝子育て〟の貴重な資料ではないか」と高く評価している。

熊野の風土と東基吉の人となり

ここで、くめと瀧廉太郎に幼児のための唱歌を作ることを勧めたり、正しい保育の在り方を普及する目的で『婦人と子ども』（『幼児の教育』の前身）を創刊した東基吉についてもふれる必要があるであろう。彼の生い立ちや生涯の仕事については、東基吉自身が昭和三二年に刊行した『皐月歌集』の中の「私の幼年時代と少年時代」及び長男の東貞一氏が執筆している『熊野誌』第二五号（昭和五〇年発行）の中の「日本のフレーベル東基吉」という文などで詳しく知ることができる。



それによると基吉は須川家に生まれ、立派な屋敷に住んでいたが、母親は基吉を出産すると間もなく六カ月で世を去り、継母に育てられるが、継母も五歳の時に亡くなっている。その直後、父、長兄も相ついで死去し、須川家は没落し、家屋敷や財産もすっかり人手にわたり、無一物になった。そこで基吉は七歳になったばかりで、東こととというお婆さんのところへ養子にやられた。この東家は貧窮洗うが如しという言葉がぴったりで、屋根は板片に石をのせてあるだけで、天井もなく雨が漏ると下から附け木を一枚押しこんで止めるという工合だった。基吉はこの東家で養母と二人で生活しながら小学校に通った。養母は彼が村役場の小使いにでもなってくれればと望んでいたが、向学心にあふれ、だれも援助してくれるものはないという状況の中で、自力で道をきり開いていっているのである。そこまで彼の意欲をかきたてたものは何であったかを知りたいと思い、基吉自身の著作や研

究者の文献を読んでみたが、十分に明らかにはできたとは言えない。

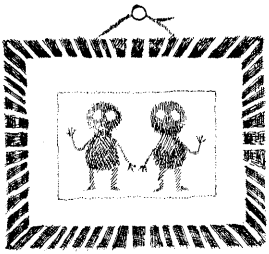
当時、新宮の地は紀伊半島の先端にあって、名古屋からも大阪からもそこへ到達するのが困難をきわめる遠隔の地であったにもかかわらず、先進的な文化が花開いていたようである。たとえば英語学校が設けられ、巡査や小学校の教師たちも競って英語を学んでいたという記録がある。そうした文化的雰囲気が、佐藤春夫（詩人）、西村伊作（文化学院創設者）、中上健次（作家）など、数々の文化人を輩出させることになったのかも知れない。

基吉は高等科二年生（今の小学校六年生）の頃から英語学校で学んでいるが、月謝が払えないので、毎日先生の家の水汲みをして、その賃を月謝にしたり、時々は先生の代稽古をしに三重県まで出かけて小学校の先生に英語を教えてアルバイト代を稼いでいる。そうした苦境の中で、船で大阪に行く人に頼んで、パーレーの万国史、クワッケンボスの米国史などの原著を取り寄せて読破している。

明治二十年熊野川が大氾濫し、川沿いの村役場の台帳が全部水浸しになったので、二二年から台帳の整理がはじまり、基吉もその仕事について、かなりの収入を得たという。その金で明治二三年に和歌山師範学校へ入学、卒業後、東京高等師範学校入学、卒業後直ちに岩手県師範学校主事となり、一年を経て、東京女子高等師範に教授として招聘され、同附属幼稚園の批評掛（今で言う研究顧問）を兼ねた。『婦人と子ども』はこの時期に基吉によって創刊されたものである。

『婦人と子ども』創刊の経緯やその時の苦労話は前出の「婦人と子ども（幼児の教育の前身）創刊当時のこどもと其頃の幼稚園の状況に就いて」に詳細に記されているので、それにゆずりたい。その中から一つ二つだけエピソードを紹介してみよう。一つは

『婦人と子ども』という誌名であるが、本来は保育専門の雑誌にしたかったのであるが、それだけでは売れないので書店が引き受けてくれない。そこで家庭でも読まれるようにと誌名が決まったという。その後、書店より解約申し出があり、基吉はそのため、自分が往訪記者になったり、広告取り、活版屋への使い走り、雑誌の包装や発送まで一人でやらなければならなかった。また、原稿料も十分にないので、当時まだ早稲田の学生であった野口雨情氏などにはビール一ダースを届けたこともあったという。



東基吉と幼児教育との訣別

東基吉は幼児に即した唱歌の提唱、育児日記の考案、『婦人と子ども』の編集のほかにも数えきれないほどの幼児教育への貢献を行っている。その一つをあげると当時の保育項目に位置づけられていた「談話」の改革である。当時は動物や植物などについての理科的知識を教えこむ〝庶物話〟と道徳的な教訓をストーレートに教えこむ〝修身話〟が中心であり、想像力をかきたてる童話は荒唐無稽のものとして斥ぞけられていた。基吉は当時のそうした風潮に批判の目を向け、「談話」の改革や幼児が没入して耳を傾けるような童話の必要性を訴えた。そうすると、「どこにそんなお話があるのですか」と保母に詰問されたりしている。そこで、基吉は「やまとの翁」の名をもって古今東西の昔話やアンデルセンそのほか近代童話作家の童話を翻訳、翻案、再話してまとめている。それらのいくつかは『婦人と子ども』の初期の頃に掲載されているが、その後は家庭向けにと、『母のみやげ』(明治三八年、同文

館)、『子供の楽園』(明治四〇年、同文館)、『日曜とくほん』(明治四〇年、東京文陽堂)などの童話集を刊行している。これらのいわゆる口演童話のためのテキストの存在は知っていたが、なかなか入手できないでいた。最近フレーベル館の元編集長の河合隆一氏がすべてを見つけ出してくれたのでそれらに目を通すことができ、基吉の苦労の跡を明らかにすることができたのである。

東基吉の幼児教育の改革の集大成は『幼稚園保育法』(明治三七年)であるが、この本はあまりにもよく知られているので特に説明の必要はないと思われる。

東基吉はあれほど幼児教育に情熱を傾け、大きな改革を行ってきたのであるが、一九〇八(明治四一)年に東京女子高等師範学校教授ならびに幼稚園批評掛の任をとかれ、宮崎県師範学校々長として赴任してからは、全く幼児教育にかかわる仕事や発言がないのは実に不思議なことである。基吉のその後の著作物からは、そのことを知る手がかりは全く得られなかった。児童文化研究者の上笙一郎氏は「東基吉=その幼児教育における仕事」(『熊野誌』第四三号)の中で、東京女子高等師範学校教授兼幼稚園批評掛という位置を離れると、多分当時としては幼児教育との接点は全くなくなり、ジャーナリズムも彼の意見に重きを置かなくなったからではないかと推察している。そして、基吉が批評掛という仕事を続けていたなら、倉橋惣三の業績と重なるいくつかの仕事をやり遂げたのではないかと述べているが、もしそうだとしたら、宮崎県師範学校長への栄転は幼児教育にとっては、まことに残念なことであったと言わなくはならない。

(子どもと保育総合研究所)